

世は他の世にあらぬなり、

我世になして己がしよ、

爲さば成らんを世の人は、

心おくれて残念めしや。

けふたつ君が旅衣、

吹くやつくしの松浦がた、

くもに消えゆく海原の、

ながめはるけき別れかな。

硯友會和歌

月前雁 (兼題)

時雨する音ときよしは羽風にて月を横きるかりのひとつら  
弓はりの月影くらき雲間より聲はかりして雁なき渡る  
物思ふ身にしあればや照る月のとわたるかりのなつかしき哉  
雲はれてそら澄み渡る月かけにまはしくまどる雁の一つら  
夜もすから鳴きてそわたる雁かねも隈なくすめる月にうかれて

基 山 一 心 錦 月 蘆

山ねろしはらふ雲間の月影にはねうちかはすさよの雁金  
 つくくと物思ひ居れば初雁の月になき行く聲あはれなり  
 まどあけてふりさけ見れば澄む月の天の戸渡る竿のかりかね  
 たかために玉章かけていとくらむ月のかつらの花のみやこに  
 山人 奇熊 芝峯

評曰、奇戀

霜後菊

こゝろきて見よや人々この後にさく花のなき菊のいろく  
 霜られの淋しき庭にしら菊の残る見るめもあはれなりけり  
 れく霜を色にも見せずませのうちになほ咲残る白菊の花  
 あさちふの霜かれはてし冬の日の寒さもしらぬ菊のいろく  
 夕霜のおくや小笠をかくれ家によはひ久しき白菊の花  
 奇熊 山人 蘆月 清泉

評曰、かくれ家に奇戀妙々

れく霜にたへすかれ行く草のうちに残れる菊の心ゆかしも  
 行秋のかたみどもみる白菊に初霜むすふ冬の曉  
 清泉

たきまさるあしたの霜をよそにしてかはり床しき白菊の花  
 世のあはれそへてそ見やる我宿の霜にうつろふ菊の一もと  
 霜をへて色香代らぬ白菊は花の中なる花といはまし  
 一松 錦山 芝峯

評曰、苦中の苦を喫して初めて人中の潔きなることを得べしこのうた意深く調高し

田家時雨

秋の田にかりはす稻をしはくいにそかせてふる村時雨かな  
 一  
 小山田のかゝしのみひるまなく又もふりくるむら時雨哉  
 桃  
 月もるとまのすきまをたのみしを時雨ふるなり小田のかりいほ  
 蘆  
 山里はいかにさひしさをさるらむ櫛の枯葉に時雨のみして  
 山  
 人

評曰、金殿玉堂にすめる人このさま心ありや否や

小田の家の軒場のけふり立ちさらすやかて時雨の雨となりゆく  
 基  
 小山田のおくても今はかりはてぬふれや時雨の雨のまにく  
 錦  
 人目さへ草さへ枯れし賤の家を情ありけにふる時雨かな  
 芝  
 峰

評曰、有情の人に無情の雨をたまかはせて世の人を諷したるいさよし

鳴子ひく門田のいねもかりつくしまなく時雨に冬は來にけり  
 清  
 小山田に日影は見えてこなたには雲をおひつゝ時雨ふるなり  
 奇  
 熊

枯蘆

厚氷むすふか波も音たへて蘆のかれ葉にさわく浦風  
 芝  
 霜風に葉はをれぬともあし原のもとの根さしは代らさるらむ  
 清  
 千鳥なく浦曲の冬の月寒く霜をさえける芦のかれはに  
 基  
 夕汐のさすかで見れば浦風に芦のかれ葉のそよくなりけり  
 山  
 人

水鳥の羽音もさえてみなと江のあしの枯葉に夕風そふく 蘆 月

評曰、聲調逼古

霜かれの蘆の古葉に風さえて見るめ淋まき灘波江の浦  
折ふしてれしの伏戸となりにけり霜にかれ行く瀬々のむら蘆

評曰、至妙

### 觀楓會席上連歌

(雜報欄參照)

千早振あまの岩戸を押し分けて見れば神代の紅葉てりけり  
さえ渡る月もいつしかかたふきて面影のこす峯のもみち葉  
見る人もなき山里にもみち葉のにしきをさつゝ住む人もあり  
紅葉散る峰にも尾にも音たてゝなくや小鳥の聲もはえあり  
荒れ果てし賤か菴に立よれば人もあらしの紅葉散りしく  
うるはしき峯の紅葉散りぬども形身は残る木枯の聲  
鳥の音も煙の底にうつもれて夕日さひしき山の下庵  
くみかはず紅葉の酒のなりひさこ枝にかけれいとまあらめや  
夕まくれ鐘の音遠く音つれて歸りをいそぐ山れるまの風

### 同席上郎題

讀む文のしほりにせはや紅葉の一葉はかりはゆるせ山姫 溪 川